

〈論文〉

中国語訳『奥の細道』の比較研究 (3)

田中 幹子 ・ 鄭 寅 瓏

はじめに

本稿は一昨年から引きつづいての中国語訳『奥の細道』の比較研究である^(注1)。今までと同様に現在中山大学外国語学院博士研究員鄭寅瓏氏に中国語の翻訳をお願いした。『奥の細道』原文は(1)と同様新日本古典文学全集『松尾芭蕉集』2「紀行・日記編」を使用する。

【原文】

〔三〕

今年元禄二とせにや、奥羽長途の行脚たゞかりそめに思ひ立て、呉天に白髪の恨を重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見えぬ境、若生て帰らばと、定めなき頼の末をかけて、其日漸早加と云宿にたどり着にけり。瘦骨の肩にかゝれる物先くるしむ。唯身すがらにと出立待るを、昏子一衣は夜ルの防ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさがりがたき花向けなどしたるハ、さすがに打捨がたくて、路頭の煩となれるこそわりなけれ。

①張香山訳『奥州小道』

今年元禄二年^①偶然泛起到奥羽作长途旅行的念头，即使倍受因旅愁而使头发尽白的苦处，仍然愿意到闻其名而尚未见的名胜一游；我对未来怀着也许能活着回来这一不可靠的心愿的。这一天好容易走到早加的驿站。首先使身体受苦的是瘦骨嶙嶙的肩膀背负着的行李。本来打算空手上路，但还是戴上了御夜寒的一袭纸衣^②、单衣、雨具、笔墨之类、以及无法辞退的临别礼品等。这些，毕竟难于扔掉，而成了路上的累赘，真是没有办法呵。

①元禄二年：1689年，芭蕉是年为四十六岁。

②紙衣：在厚纸上涂上几道涩棉汁，晒干，再沾上一夜露水，揉软后制成。

〈張香山訳の日本語訳〉

今年は元禄二年^①で、たまたま奥羽に行って長い旅をしようと思った。たとえ旅の憂いのせいで髪の毛が全部白くなったとしても、名前を聞いたことがあるがいまだに見たことのない名勝に行ってみたいと思った。将来に対しては、生きて帰れるかもしれないという頼りのない望みを抱えている。この日、ようやく早加の宿駅に着いた。まず、体を苦しめたのは痩せて骨ばった肩にかかった荷物だ。もともとは空手で旅に立とうと思ったが、夜の寒さを凌ぐ一枚の紙衣^②、一重、雨具、筆と墨の類、また断れない別れの贈り物などを持ってしまった。これらは、やはり捨てがたくて、旅の足手まといとなり、本当にどうしようもないなあ。

注釈：

①元禄二年——1689年、芭蕉はこの年四十六歳である。

②紙衣——厚い紙にいくつか柿渋を塗ってから乾かして、そして一夜の露に濡らせて、柔らかく揉めてからできたものである。

②陳岩訳『奥州小路』

（陳岩氏は日本語の原文を挙げながら、原文に中国語の注をつけて、さらに中国語訳を付ける形で訳している。）

三、草加

ことし元禄二^①とせにや、奥羽^②長途の行脚只かりそめに思ひたちて、呉天に白髪^③の恨を重ぬといへ共、耳にふれていまだめに見ぬさかひ、若生て帰らばと、定なき頼の末をかけ、其日漸草加^④と云宿にたどり着にけり。瘦骨の肩にかゝれる物先くるしむ。只身すがらにと出立侍を、昏子一衣^⑤は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさがりたき銭などしたるは、さすがに打捨がたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

[注解]

- ①元禄二年（1689年）、芭蕉時年46歳。
- ②奥州：“奥羽”、“陸奥”和“出羽”之略、为今日本东北六县。
- ③芭蕉借宋《诗人玉屑·閩僧可士送僧詩》中“笠重吳天雪、鞋香楚地花”句意、表旅次遙遠艰辛。
- ④今埼玉县草加市。距千住約10千里、为当时奥州道第二个驛站。
- ⑤紙衣：用厚紙做的衣服、当时用于旅行、防寒。

三、草加

今年、即元禄二年、吾忽生去奥州作长途旅行之念、虽然明知此行要受吳雪染白黑发之苦、但还是渴望一睹那久闻未见的土地。倘能生还、亦可谓人生乐事。怀着一线渺茫的希望、跋涉重重山关、这天终于抵达草加。瘦骨嶙峋的肩头背着沉重的行囊、首先使吾难耐。本来打算空身上路、但夜里御寒的一件紙衣、浴衣、雨具、笔墨文具、以及推辞不掉的贈别礼物、总是不忍将它们丢弃。这些什物、合成重負、使吾吃尽苦头、但却毫无摆脱良策。

〈陳岩訳の日本語訳〉

注解：

- ①元禄二年（1689年）、芭蕉はその時46歳である。
- ②奥州：「奥羽」、「陸奥」と「出羽」の略称で、現日本の東北六県である。
- ③芭蕉は宋の「詩人玉屑・閩僧可士送僧詩」の中の「笠重吳天雪、鞋香楚地花」の句の意を借りて、今回の旅先での宿の遠さと辛さを表現している。
- ④現埼玉県草加市。千住より約10キロがあり、当時の奥州道の二番目の宿場である。
- ⑤紙衣：厚い紙で作られた服であり、当時では旅行、防寒のために用いられている。

三、草加

今年、つまり元禄二年。私は突然に奥州へ長旅をしようと思った。今回の旅で黒い髪が吳雪に白く染められる苦しみを味わってしまうとわかっているものの、そのかねてから聞いたがいまだに見たことのない土地を切に見たいと思った。もし生き

て帰ることができれば、それも人生の楽しみだと言えよう。微かな希望を抱えて、何重の山の関を越えて、この日ようやく草加についた。痩せて骨ばった肩が重い荷物を背負い、まず私に堪えがたく感じさせた。空身で出発しようと思ったが、夜の寒さを凌ぐ一枚の紙衣、浴衣、雨具、筆と墨などの文房具、そして断れない饞別の品、いつまでも捨てるに忍びない。これらのものが重い負担となり、私に大変な目にあわせつくしているが、抜け出すいい方法は少しもない。

③鄭民欽訳『奥州小路』

草加

今年是为元禄二年^①，奥羽^②之长途跋涉惟系心血来潮，即使倍尝吴天白发之恨^③，犹欲亲临虽耳闻尚未目睹之胜地。托生还于期待，寄心愿于虚幻，是日终抵草加驿站^④。瘦骨嶙峋之双肩负重行囊，实为辛苦。本欲轻装上路，然一袭夜间御寒之纸衣^⑤、浴衣、雨具、笔墨之类，兼之无法辞退之赠礼，难以割舍，遂成行旅之累赘，实无奈也。

①元禄二年，即1689年。时年芭蕉四十六岁。曾良四十一岁。

②奥羽，陆奥、出羽的合称。指磐城、岩代、陆前、陆中、陆奥、羽前、羽后七国。

③《诗人玉屑·闽僧可士送僧诗》：“笠重吴天雪，鞋香楚地花。”吴国，意指偏远之地。吴国降雪即将化作自己白发般的艰苦行旅，或言行旅偏远，旅愁萦怀，致使头发皆白。

④从江户出发后的第二个驿站。今埼玉县草加市

⑤和纸涂柿漆做成的御寒挡雨的衣服。

〈鄭民欽訳の現代語訳〉

草加

今年は元禄二年^①。ただの思いつきで奥羽^②への長旅をしようと思い、たとえ倍に呉天白髪^③の恨み^④を味わうことになってしまっても、耳にしたことがあるがいまだ目で見たことのない名所に行きたい。生き返ることを期待し、自分の願いを幻にたくして、この日ようやく草加の宿駅^④についた。痩せて骨ばった両側の肩に重い荷物がかかり、実に大変だ。身軽に出発しようと思ったが、夜間の寒さを凌ぐ紙衣^⑤

一揃い、浴衣、雨具、筆墨など、及び断れない贈り物が捨てがたく、ついに旅の足手まどいになり、本当にどうしようもないのだ。

- ①元禄二年、つまり 1689 年。その時芭蕉は四十六歳。曾良は四十一歳。
- ②奥羽、陸奥、出羽の総称。磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後七国を指す。
- ③「詩人玉屑・閩僧可士送僧詩」：「笠重吳天雪、鞋香楚地花」。呉国とは辺鄙で遠い土地のことである。呉国で降ってきた雪が自分の白髪になるというような苦しい旅は、旅が辺鄙で遠いから、旅愁が胸にいっぱいとなり、髪の毛を白くさせたということを行っているかもしれない。
- ④江戸から出発してからの二番目の宿場。現埼玉草加市。
- ⑤和紙に柿渋を塗ってできた寒さと雨を凌ぐ服である。

④陳徳文訳『奥州小道』

(三)

今年是元禄二年，忽然想到奥羽做一次长途旅行。虽说明知会有“吴天落雪化白发”^①之憾，但得以亲历耳有所闻而日未能见之诸方胜景，倘能生还，实乃一大幸事。寄望于茫然之未来，当日终于行至草加驿馆。瘦骨嶙峋，肩扛行李，不堪其苦。本想只身独行，但仍需纸衣一袭以防夜寒，单衣、雨具、笔墨以及亲友馈赠之物亦难以割舍，只好任其成为途中烦累，徒叹奈何耳。

- ①《诗人玉屑》：“笠重吴天雪，鞋香楚地花。”谣曲《竹雪》：“彼非吴天雪，雪积竹笠化白发。”芭蕉兼而用其意。

〈陳徳文訳の日本語訳〉

(三)

今年は元禄二年。急に奥羽へ長い旅をしようと思った。「呉天の落雪が白髪に変わる」^①という遺憾があると知っているが、耳にしたことがあり目で見ることがな

い多くの名所を自ら体験することができ、もし生きて帰ることができれば、(それも) 実に一大の喜ぶべき事だ。見当がつかない未来に希望をよせて、当日ようやく草加の宿駅に着いた。やせこけて、肩に荷物がかかり、その苦しみに耐えがたい。もともとは身一つで行こうと思ったが、夜の寒さを凌ぐ紙衣一揃いが必要で、一重、雨具、筆墨、及び親友からの贈り物が捨てがたいので、それらが旅の足手まどいになるのにまかせ、どうしようもないと嘆くしかない。

①「詩人玉屑」:「笠重吳天雪、鞋香楚地花」。謡曲「竹雪」:「それは吳天の雪ではない。雪が笠に積もり、白髪となる」。芭蕉はその両方の意味も用いている。

⑤鄭茂清訳『奥之細道』

三、草加

今年、人道は元祿二年^①、率爾起意奥羽長途之行脚^②、明知不免重飲吳天白髮之恨^③、然已耳聞而尚未目睹之處仍多、竊以為或能幸而生還、乃托虛幻之悲願於未來。是日、一路蹣跚、終抵草加驛館^④。肩骨嶙峋^⑤、背負行囊、最感艱辛。原想隻身輕裝就道、但需紙衣一襲以防夜寒^⑥、又需浴衣、雨具^⑦、筆墨之類^⑧；另有餞禮、卻之不恭、究難拋擲、竟成途上累贅、唯有徒喚奈何而已。

①元祿二年、己巳、西歷一六八九年。清康熙二十八年。

②「奥羽」為江戸時代陸奥國（又稱奥州、有五十四郡）與出羽國（又稱羽州、有十二郡）之略、即今日本東北之福島、宮城、岩手、青森、秋田、山形六縣。「奥之細道」之「奥」、則為「奥羽」之略。芭蕉於元祿二年陰曆三月初旬出讓居處「芭蕉庵」、同年二十七日與門人曾良開始奥羽長途之旅。「行脚」、宋陸庵、《祖庭事苑・八》:「行脚者、謂遠離鄉曲、脚行天下、脫情捐累、尋訪師友、求法證悟也。所以學無常師、徧歷為上。」案:芭蕉於此次行脚、其實早有計劃、盼望久矣、所謂「率爾起意」(只かりそめに思ひたちて)云云、蓋基於修辭策略、藉以增加戲劇性效果。有人則認為發自芭蕉浮生如寄、諸行無常之「宿觀衝動」(尾形侑、《おくのほそ道評釈》、頁四一)。

③今中國江蘇省、古為吳國地、喻遠離京城之異鄉、即白居易詩〈江南送江北客〉:「故園望斷欲何如、楚山吳 = 水萬里餘」之意。「吳天白髮」之典據、諸註或引李洞、〈送三藏歸西域〉:「十萬里程多少難、沙中彈舌受降龍。五天到日應頭白、月落長安半月鐘。」(宋

周弼，《三體詩》，卷一)。「五天」與「吳天」讀音同(ごてん)，即五天竺，指印度。或引〈閩僧可士送僧詩〉：「一鉢即生涯，隨緣度歲華。是山皆有寺，何處不為家。笠重吳天雪，鞋香楚地花。他年訪禪室，寧憚路岐賒。」(宋魏慶之，《詩人玉屑》，卷二十)。謠曲(能樂之歌詞或腳本)亦有蹈襲二詩者，如《竹雪》：「雖不在吳山，鞋香楚地花。化成老人白髮。」又如〈葛城〉：「笠重吳天雪，鞋香楚地花。肩上斗笠，肩上斗笠，斜映無影月，挑著柴火，且折不香花，歸去也。」芭蕉似頗愛之，有句云：「夜寒衾重 遙想吳天迢迢 應在飄雪」(夜着は重し 吳天に雪を 見るあらん)(風國編，《泊船集》，一六九八)。又云：「觀露城宮野，拽杖吳天雪。」(宮城野の露見にゆかん、吳天の雪に杖を拽かん)(《笠はり》，年月不詳)。至此，原典之「頭白」、「吳天雪」、「笠雪」，已轉成或溶為「吳天白髮」矣。

- ④一作「早加」，為日光街道第二驛站，離千住約二里八町(八・七公里)。今埼玉縣草加市。是日芭蕉並未在此留宿。據曾良《隨行日記》：「廿七日夜，宿粕壁，距江戶九里餘。」粕壁即春日部，均讀「かすかべ」，日光街道第四驛，今春日部市。案：日文所謂「街道」，指連接街市、驛站與關口而通往較遠地區之幹路或要道。
- ⑤李白有〈戲贈杜甫〉詩：「飯顆山頭逢杜甫，戴頂笠子日卓午。借問別來太瘦生，總為從前作詩苦。」詩意詼諧，若改成「作句苦」以贈芭蕉，似可彷彿詩聖與俳聖尋詩覓句之甘苦也。案：芭蕉在〈四山瓢〉(一六八六)一文中，引素堂山口信章(一六四二——一七一六)所贈〈瓢之銘〉：「一瓢重泰山，自笑稱箕山。莫怪首陽山，這中飯顆山。」並云：「飯顆山為老杜居地，李白有戲之之句。素翁欲仿李白以喻我清貧也。」
- ⑥「紙衣」，或作「紙子」，訓讀同(かみこ)，用厚韌白紙塗以柿漆(柿核汁液)，塗抹數次後，日下曬乾，夜沾露水，揉之使軟，可以裁製衣服或披風。原為僧侶所穿，後來一般庶民亦用來防寒。
- ⑦「浴衣」，棉衣單衣(袍)，日人於浴後穿用，亦可當夏日便裝。「雨具」，指雨衣、雨傘之類。
- ⑧除筆硯墨盒之外，應有「懷紙」、「短冊」之類。懷紙，可摺疊放在懷中備用之詩箋。短冊，亦作短尺，書寫詩歌俳句所用之窄長詩箋。

〈鄭茂清訳の日本語訳〉

三、草加

今年、人々は元禄二年^①という。奥羽へ長途の行脚^②をしようと急に思い立ち、

再び吳天白髮の恨み^③を抱えることに免れないとわかっているにもかかわらず、耳で聞いたが目で見たことのない所が多くて、もし幸いに生きて帰ることができればと思い、幻な悲願を未来に託した。その日、途中ではずっと足元がおぼつかず（ずっとよろよると歩き）、ようやく草加の宿場^④に着いた。肩が骨ばっており^⑤、重い荷物を背負い、とてもつらいと感じた。もともとは身一つで身軽に出発しようと思ったが、夜の寒さを凌ぐ紙衣一揃いが要り^⑥、また浴衣、雨具^⑦、筆墨^⑧なども必要とし、更に餞の品が断れず、捨てることはできなくて、ついに途上の足手まどいになってしまい、ただ無駄にどうしようもないと嘆くしかない。

①元禄二年、己巳、西暦一六八九年。清康熙二十八年。

②「奥羽」は江戸時代の陸奥国（また奥州ともいい、五十四郡がある）の略称であり、現日本東北の福島、宮城、岩手、青森、秋田、山形六県である。「奥の細道」の「奥」は「奥羽」の略したものである。芭蕉は元禄二年陰暦三月初旬に住居「芭蕉庵」を譲り、同年の二十七日に門人の曾良とともに奥羽への長旅を始めた。「行脚」について、宋の陸庵は『祖庭事苑・八』に「行脚というものは、故郷から遠く離れ、歩行で世界を巡り、人情から抜け出し、持っているものを捨て、師と友に訪ね、仏法を求めて悟るのである。そのため、多くの人に学び、諸国を遍歴することが最善である」という。私が考えることには、芭蕉は今回の行脚に対して、前から計画を立てていて、待ちに待っていたのである。「急に思い立ち」（只かりそめに思ひたちて）というのも修辞上の策略によるもので、ドラマ性的な効果を増加させるためである。これは芭蕉の人生は儂くて、世間に居候するようなもので、諸行は無常であるという「宿命観衝動」によるものだと指摘されている（尾形侑、『おくのほそ道評釈』、頁四一）。^(注2)

③現中国江蘇省であり、昔は呉国の土地である。都から離れた異境を喩えている。つまり白居易詩「江南送江北客」：「故園望斷欲何如，楚山吳水萬里餘」の意である。「吳天白髮」の典拠について、諸注釈の中に李洞を引用するものがあり、「送三藏歸西域」：「十萬里程多少難，沙中彈舌受降龍。五天到日應頭白，月落長安半月鐘。」（宋周弼、『三體詩』卷一）「五天」と「吳天」は発音が同じで（ごてん）、つまり五天竺で、インドを指す。或いは「閩僧可士送僧詩」を引用する：「一鉢即生涯，隨緣度歲華。是山皆有寺，何處不為家。笠重吳天雪，鞋香楚地花。他年訪禪室，寧憚路岐賒。」（宋魏慶之、《詩人玉屑》，卷二十）。謡曲（能楽の歌詞や脚本）にもこの二つの詩を踏襲したものがあり、たとえば

『竹雪』のように：「雖不在吳山，遙想笠上積雪，化成老人白髮。（吳山にいるわけではないが、笠に雪が積もり、老人の白髪になることに思いを馳せる。）」又『葛城』のように：「笠重吳天雪，鞋香楚地花。肩上斗笠，肩上斗笠，斜映無影月，挑著柴火，且折不香花，歸去也。」芭蕉はこれにすこぶる興味を持ち、「夜の服が重く、遥かにある吳天を思い、雪が降っているはずだ」（夜着は重し 吳天に雪を 見るあらん）（風國編，《泊船集》，一六九八）という句を詠んでいる。また、「宮城野の露を眺め、杖を引きながら吳天の雪」（宮城野の露見にゆかん、吳天の雪に杖を曳かん）（〈笠はり〉，年月不詳）というものもある。ここまでくると、原典の「頭白」、「吳天雪」、「笠雪」は「吳天白髮」に変化されたのである。

- ④「早加」ともいう。日光街道の二番目の宿場で、千住から約二里八町（8.7キロメートル）がある。現埼玉県草加市。この日、芭蕉はここに泊まらなかった。曾良の『隨行日記』によると、「廿七日の夜、粕壁に泊まり、江戸より九里余りの距離がある」という。粕壁とは春日部であり、両方とも「かすかべ」と読み、日光街道四番目の宿場で、現春日部市である。私が考えることには、日本語の「街道」は町、宿場と関口を繋げる遠くの地域へ通行する主要の道や要路をさす。
- ⑤李白には「戲贈杜甫」という詩がある：「飯潁山頭逢杜甫，戴頂笠子日卓午。借問別來太瘦生，總為從前作詩苦。」詩の意味はユーモアであり、もし「作句苦」に変えて芭蕉に送ることができたら、詩聖と俳聖が詩句を探し出す楽しみと苦しみを髣髴するようになるかもしれない。私が考えるには、芭蕉は「四三瓢」（一六八六）の文章の中に、素堂山口信章（一六四二——一七一六）が送ってきた「瓢之銘」：「一瓢重泰山，自笑稱箕山。莫怪首陽山，這中飯潁山。」を引用し、そして、「飯潁山は杜甫がいた山であり、李白にはこれをからかった詩がある。素翁は李白に習って私の清貧を喩えようとしているのである」という。
- ⑥「紙衣」、また「紙子」とも書き、訓読は同じである。腰の強い和紙に柿渋を塗って、何回も塗った後に、天日で乾燥させたうえ、夜に露をつかせて、揉んで柔らかくする。服や羽織に作ることができる。もともとは僧侶が着るものであったが、後に一般庶民に防寒具として用いられるようになった。
- ⑦「浴衣」とは綿入れの服やひとえ（袍）のことである。日本人は沐浴の後に着用し、または夏の普段着とする。「雨具」とはレインコートや傘などのものを指す。

⑧筆、すずりと墨入れ以外は、「懐紙」や「短冊」があるはずである。「懐紙」とは、折り畳んで懐に入れて必要に備えるための詩箋である。「短冊」とは、また「短尺」とも書き、詩歌俳句を書くための細長い詩箋である。

二 各訳分析

今までと同様（「中国語訳『奥の細道』の比較研究」（1）・（2））本文を区分けして、該当箇所を各訳比較した上で『奥の細道』本文に込められた芭蕉の思いと合わせて検討する。今回の区分けは以下の4か所とする。

（1）今年元禄二とせにや、奥羽長途の行脚たゞかりそめに思ひ立て、呉天に白髪の恨を重ぬといへども、（2）耳にふれてはまだ目に見えぬ境、若生て帰らばと、定めなき頼の末をかけて、（3）其日漸早加と云宿にたどり着にけり。瘦骨の肩にかゝれる物先くるしむ。（4）唯身すがらにと出立侍るを、忸子一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさがたき花向けなどしたるハ、さすがに打捨がたくて、路頭の煩となれるこそわりなけれ。

以下、比較検討する。

（1）「今年元禄二とせにや、奥羽長途の行脚たゞかりそめに思ひ立て、呉天に白髪を恨を重ぬといへども」

「今年元禄二とせや」が自筆本では「此のたび」となっていた。自筆本では二章の冒頭「弥生も末の七日元禄二とせや」となっており、曾良本が「弥生の末七日」に続いて書かれていた「元禄二とせや」を傍線で消して三章頭に移動させていた。二章の内容が春が行く心と旅立つ抒情を重ねる点が文学テーマなのに対し、三章は客観的に旅の記録として描かれている。その客観性のため年号を三章に持ってきたのであろう。中国訳本はすべて曾良本によっている。①張香山訳『奥州小道』②陳岩訳『奥州小路』③鄭民欽『奥州小路』では、西暦1689年、芭蕉が四十六歳であることを注する。③鄭民欽『奥州小路』では曾良が四十一歳であることも示す。年齢を示すことが当時としては老年を迎えた二人旅の陰しさをわびしさが想像される。⑤鄭茂清『奥之細道』では清康熙二十八年と注し中国人に時代を意識させようとしている。「奥羽」については②陳岩訳『奥州小路』では「現日本の東北六県」と注し、新古典文学全集の頭注とほぼ同文である。③鄭民欽『奥州小路』で

は、当時の国名をあげ⑤鄭茂清『奥之細道』では「〔奥羽〕は江戸時代の陸奥国（また奥州ともいい、五十四郡がある）の略称であり、現日本東北の福島、宮城、岩手、青森、秋田、山形六県である。「奥の細道」の「奥」は「奥羽」の略したものである。」と詳しい。さらにここまでのまとめとして「芭蕉は元禄二年陰暦三月初旬に住居「芭蕉庵」を譲り、同年の二十七日に門人の曾良とともに奥羽への長旅を始めた。」と注する。また「行脚」にも尾形竹氏『おくのほそ道評釈』を引用し「宋の陸庵は『祖庭事苑・八』を紹介。さらに尾形氏の「私が考えることには、芭蕉は今回の行脚に対して、前から計画を立てていて、待ちに待っていたのである。「急に思い立ち」（只かりそめに思ひたちて）というのも修辞上の策略によるもので、ドラマ性的な効果を増加させるためである。これは芭蕉の人生は儂くて、世間に居候するようなもので、諸行は無常であるという「宿命観衝動」によるものだ」と解説している。

ただしここでの「行脚」はもっと軽いものである。むしろここは「かりそめに思ひたち」の「かりそめ」に注目する。この部分尾形氏の「修辞上の策略」という解釈はややおおげさだが首肯できる。①張香山訳『奥州小道』は「たまたま思ひたち」②陳岩訳『奥州小路』では「突然に」③な鄭民欽『奥州小路』「ただの思ひつき」④陳徳文『奥州小道』「急に」⑤鄭茂清『奥之細道』「急に思い立ち」と訳する。かりそめは「本物」に対したものであり、芭蕉としては入念な計画をしてというものではなく、ふとした衝動にかられてという演出をしたかったのだろう。芭蕉がこの旅は自分の意志からではなく、何ものにも拘束されない自由な旅という形をとりたかった故の演出ではないだろうか。それが以下に続くのびやかな世界観に繋がるように思う。

「呉天に白髪を重ぬといへども」は新古典文学全集本に「呉国の空に降る雪がそのまま白髪にもなるような、つらい旅の嘆き恨みを重ねるのはわかっているけれども」とし「詩人玉屑・閩僧可士僧ヲ送ル詩」の中の「笠ハ重シ呉天ノ雪、鞋ハ香シ楚地ノ花」の詩句をうけて、謡曲「竹雪」に「いつを呉山にあらねども笠の重さよ、老の白髪となりやせん」とある。芭蕉は詩とともにこの謡曲を念頭においてこの文章を書いたのだろう。むしろこの謡曲が直接影響を与えたと考える。中国各訳を見ていくと「閩僧可士送僧詩」を指摘しているものが②陳岩訳『奥州小路』③鄭民欽『奥州小路』、なおこの注には「呉国とは辺鄙で遠い土地のことである。呉国で降ってきた雪が自分の白髪になるというような苦しい旅は、旅が辺鄙で遠いから、旅愁が胸にいっぱいとなり、髪の毛を白くさせたということを行っているかもしれない。」と解説がされている。④陳徳文『奥州小道』が詩句とともに「謡曲「竹雪」:「それは呉天の雪ではない。雪が笠に積もり、白髪となる」とし、芭蕉はその両方の意味も用」と指摘する。⑤鄭茂清『奥之細道』ではまず「現中国江蘇省

であり、昔は呉国の土地である。都から離れた異境を喩えている。つまり白居易詩「江南送江北客」：「故園望斷欲何如，楚山吳水萬里餘」の意である。」と呉国のイメージを注し、さらに「吳天白髮」の典拠について、諸注釈の中に李洞を引用するものがあり、「送三藏歸西域」：「十萬里程多少難，沙中彈舌受降龍。五天到日應頭白，月落長安半月鐘。」（宋周弼、『三體詩』卷一）「五天」と「吳天」は発音が同じで（ごてん）、つまり五天竺で、インドを指す。或いは「閩僧可士送僧詩」を引用する：「一鉢即生涯，隨緣度歲華。是山皆有寺，何處不為家。笠重吳天雪，鞋香楚地花。他年訪禪室，寧憚路岐賒。」（宋魏慶之，《詩人玉屑》，卷二十）。謡曲（能楽の歌詞や脚本）にもこの二つの詩を踏襲したものがあり、たとえば『竹雪』のように：「雖不在吳山，遙想笠上積雪，化成老人白髮。（呉山にいるわけではないが、笠に雪が積もり、老人の白髪になることに思いを馳せる。）」又『葛城』のように：「笠重吳天雪，鞋香楚地花。肩上斗笠，肩上斗笠，斜映無影月，挑著柴火，且折不香花，歸去也。」芭蕉はこれにすこぶる興味を持ち、「夜の服が重く、遥かにある呉天を思い、雪が降っているはずだ」（夜着は重し呉天に雪を見るあらん）（風國編，《泊船集》，一六九八）という句を詠み、また「宮城野の露を眺め、杖を引きながら呉天の雪」（宮城野の露見にゆかん、呉天の雪に杖を拽かん）（〈笠はり〉）、年月不詳」というものもある。ここまでくると、原典の「頭白」、「吳天雪」、「笠雪」は「吳天白髮」に変化されたのである。」と尾形氏の解釈を全面的に取り入れている。芭蕉が直接影響を受けたのは謡曲『竹雪』の文脈だろうが、『葛城』も承知しており「吳天雪」という表現を好んでいたことは確かであろう。この部分の解説としては、果たして芭蕉が「閩僧可士送僧詩」まで遡ってこの部分を書いたかは不明だが、中国読者のためには影響を受けた謡曲の本説の指摘は有益であると思う。

（2）「耳にふれていまだ目に見えぬ境、若生て帰らばと、定めなき頼の末をかけて」

「耳にふれていまだ目に見えぬ境」を①張香山訳『奥州小道』では「名勝」、④陳徳文『奥州小道』では「名所」としている。このニュアンスだど物見遊山的になり漂泊するぞという芭蕉の気分とはややずれるか。「若生て帰らばと定めなき頼の末をかけて」の部分、険しい旅に出発するのだという気負いからの文脈である。従って生きて帰る可能性がほとんどないという決死の決意という程だと重すぎる。よって①張香山訳『奥州小道』「将来に対しては、生きて帰れるかもしれないという頼りのない望みを抱えている。」くらいが適当と言えよう。②陳岩訳『奥州小路』「もし生きて帰ることができれば、それも人生の楽しみだと言えよう。微かな希望を抱えて」③鄭民欽『奥州小路』「生き返ることを期待し、自分の願いを幻にたくして」④陳徳文『奥州小道』「もし生きて帰ることができれば（そ

れも)実に一大の喜ぶべき事だ。見当がつかない未来に希望をよせて」⑤鄭茂清『奥之細道』
「もし幸いに生きて帰ることができればと思ひ、幻な悲願を未来に託した」などの翻訳は、
芭蕉のニュアンスに比べ深刻すぎる。

(3) 「其日漸早加と云宿にたどり着にけり。瘦骨の肩にかゝれる物先くるしむ。」

①張香山訳『奥州小道』「この日、ようやく早加の宿駅に着いた。まず、体を苦しませたのは瘦せて骨ばった肩にかかった荷物だ。」②陳岩訳『奥州小路』と⑤鄭茂清『奥之細道』では「日光街道のあ二番目の宿場で、千住から約二里八町（8.7キロメートル）がある。」と出発点からの距離が伝わるように注している。さらに⑤鄭茂清『奥之細道』では「この日、芭蕉はここに泊まらなかった。曾良の『隨行日記』によると、「廿七日の夜、粕壁に泊まり、江戸より九里余りの距離がある」という。粕壁とは春日部であり、両方とも「かすかべ」と読み、日光街道四番目の宿場で、現春日部市である。私が考えることには、日本語の「街道」は町、宿場と関口を繋げる遠くの地域へ通行する主要の道や要路をさす。」と詳しい。

(4) 「唯身すがらにと出立待るを、昏子一衣は夜ルの防ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆の
たぐひ、あるはさがたき花向けなどしたるハさすがに打捨がたくて、路頭の煩
となれるこそわりなけれ。」

「昏子」について①張香山訳『奥州小道』や②陳岩訳『奥州小路』③鄭民欽『奥州小路』
⑤鄭茂清『奥之細道』では「昏子」について注がある。さらに⑤鄭茂清『奥之細道』は日
本の風習である「浴衣」の使用方法や書かれていない「懐紙」や「短冊」にも言及しており、
日本文化の解説をしようとしている。

以上までが旅の準備及び吟行前夜という部分である。『奥の細道』のプロローグである。
ここから読み取れるのは、芭蕉のこの旅にける期待の大きさである。この旅がより劇的
になるように、隅田川の芭蕉庵からあたかも直接出発しているかのような一章から二章へ
の展開、旅人である春が去るとともに自分も去るという表現、そしてこの旅への決意の確
認の三章と実際よりもドラマチックなものに脚色している。(註3)

ここまでの中国各翻訳を比較して、⑤鄭茂清『奥之細道』が圧倒的な注の量で詳しいこ
とは一目瞭然である。⑤鄭茂清『奥之細道』は尾形竹氏の解説を大幅に踏襲している。し
かし⑤鄭茂清『奥之細道』も含め、中国訳全般に言えることだが、日本人ならば暗黙の了
解で本文の隙間から見られる脚色に込められたややおかしみのある気負いや軽みが読みと

れていない。むしろ芭蕉という巨人の前に無条件にひれ伏すような過剰な悲壯感を強調するように訳しているように思う。

以降、次号からは著名句の章を抜粋し、比較検討する予定である。

注

注1 拙稿「中国語訳『奥の細道』の比較研究」(1)および(2)(札幌大学総合論叢第44号・46号)(2017年・2018年・10月)。

注2 尾形侑著『おくのほそ道評釈』平成13年5月 角川書店。

注3 新日本古典文学全集の解題に『奥の細道』の書誌について解説がある。芭蕉自身による清書本『奥の細道』が存在しない。芭蕉自筆本、曾良本も芭蕉の目指した完成体ではないが、それらの存在から芭蕉が他の著作と同様に何度も推敲していることは確かである。推敲の目的は、事実の描写よりもより文学的内容に高めるためであり、その過程で事実を脚色することも含まれる。

追記 本稿は2018年度札幌大学研究助成金の成果の一つである。